

琉球大学学術リポジトリ

研究室紹介（県農業試験場園芸支場野菜研究室）

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017127

県農業試験場園芸支場野菜研究室

本研究室は、園芸室が沖縄市から具志川市に移転後の昭和53年、農業試験場の組織改正によって、園芸室が園芸支場に昇格したのに伴って設置された。研究スタッフは研究職4名、農業技術補佐員2名で構成され、冬期温暖な気象条件を生かした冬春期出荷野菜の栽培技術試験を中心に取り組んでいる。設置当初は野菜の栽培技術のみならず、在来野菜の系統選抜、有望野菜の導入等、育種に関する試験も実施してきたが、昭和62年育種部門の研究室設置に伴い、これらの課題を移行した。

野菜は品種、品目とも多彩で研究業務も多岐に亘っているが、これまで行われてきた研究課題の大まかな流れを紹介すると、昭和53年から57年にかけて露地野菜のインゲン、施設野菜のメロン、スイカ、ナス、ピーマンなど、県外移出に向けて、適応性品種の選定や作型栽培技術の開発等を実施してきた。それと共に夏場における自給野菜の拡大を図るため、耐暑性品種の選定、資材を活用した夏野菜の栽培技術等も検討してきた。

昭和60年からメロン、オクラ、ピーマン等、冬春期を中心とした作型栽培やロックウール、水耕等の溶液栽培に関する試験に取り組み、多くの技術を確立し普及に供した。このように課題は農業をとりまく諸情勢に対応して変遷してきた。現在実施している主な研究の概要は以下の通りである。

1. 高収益野菜新規品目の開発

野菜の生産量は全体的に停滞傾向にあり、今後野菜の生産拡大を図るためには、収益性の高い品目を導入し、適応性および栽培技術を確立し、本県への定着化を検討する必要がある。

国内外から新規品目を導入して検討した結果、有望品目としてシソ、モロヘイヤ、食用ギクが選定された。これらの栽培技術としてシソ、おおばの栽培仕立て法

は株間15cm、無整枝が良く、モロヘイヤでは冬期、4時間電照の株間30cm、4条植えの2本仕立てで増収する傾向にあった。食用ギクについては適品種の選定を実施したが、増収、品質向上を図る栽植密度については現在検討中である。

2. 移出野菜類の栽培、輸送技術実証試験

野菜の生産振興に大きな阻害要因となっていたウリミバエの根絶に伴い、果菜類の移出条件が改善され、需要の大きいキュウリ、トマト等の出荷が期待されている。しかし、これら大衆品目は高価格を期待できず、船舶輸送による低コスト輸送が求められており、解決する点が多く流通加工室との共同研究を実施している。

本研究室では栽培技術の面を検討しメロン、ピーマンの品種選定や加温、灌水量、仕立て法等の栽培技術を明らかにした。現在、トマトの高品質生産と、1月～4月の冬期における多収穫技術の栽培法について実施している。

3. 移植、播種の機械化による多品目高品質野菜生産

野菜生産は育苗、定植から収穫まで煩雑な作業と多大な労力を要する事から、これら一連の作業に対する機械化が求められている。本課題は機械化による軽作業化を確立するため、沖縄県（野菜研、機械経営部）、兵庫県、三重県、大阪府の4府県の共同研究で、本県ではキャベツ、レタス等、土地利用型作目の規模拡大を図るための、移植機に適合した苗の生産技術、移植機種種の選定等を実施している。

全国的な傾向であるが、今後ますます農業従事者の高齢化と婦女子化の進行が予想され、対応策として現在実施中の機化による軽作業化や、作業効率の向上を図るための施設化等、早急な研究成果が期待されている。

(宮平永憲、宮城信一)